

## 三稜会懸賞論文

## 稲葉真弓賞特集

三稜会会報別冊

平成27年8月1日 第64号別冊

発行 三稜会  
 (津島高校同窓会)  
 事務局(津島高校内)  
 〒496-0853  
 津島市宮川町3-80  
 電話 0567-28-4158  
 発行人 横井 義一



▲川端康成文学賞(58歳時)  
 ー受賞作『海松(みる)』  
 この賞には賞状はなく、代わりとして、時計ケース背面に書かれている。

詩人・作家  
**稲葉真弓**  
 さんの  
 展示コーナーを  
 設置!

(9月27日オープン)



▲初の大きな賞を獲得(23歳時)  
 ー受賞作『蒼い影の痛みを』

## 第5回 稲葉真弓賞 審査結果発表

テーマ 『時 間』

応募総数 8校(津島、津島東、津島北、美和、稲沢、稲沢東、海翔、清林館)  
 614名

審査経過 一次審査(平成27年5月9日) 二次審査(平成27年5月23日)

入賞作 8名 最優秀賞、優秀賞はP4~P8に掲載。  
 総評、選評はP8に掲載。

〈最優秀賞〉1名	清林館高校	1年	松本 歩純さん
〈優秀賞〉3名	津島東高校	2年	谷川原孝明さん
	津島東高校	2年	濱島 朱里さん
	津島高校	1年	岡田 蒔絵さん
〈佳作〉4名	美和高校	2年	吉安 遥華さん
	清林館高校	1年	川田 泰羽さん
	津島東高校	2年	館 ひよりさん
	清林館高校	1年	二村 奨さん



(表記学年は応募当時のもの)

表彰式 平成27年9月27日(日)午前10時~ 津島高校三稜館(体育館)  
 (稲葉真弓さんコーナーの開設式典の中で行います。)

入賞された皆さん、おめでとうございます。また、ご応募いただいた皆さん、ありがとうございました。第1回からの最優秀賞と優秀賞作品は、三稜会ホームページに掲載してあります。

三稜会ホームページ <http://www.sanryokai.com>

【協賛団体】(株)ヨシツヤ (株)宇佐美鋳油 クローバーTV・エフエムななみ77.3MHz  
 虎ノ門法律経済事務所 (株)三和スクリーン銘板 (株)朝本組 協和交易(株)  
 (株)原ネームプレート製作所 (株)日本一ソフトウェア

【後援】(株)中日新聞社

(新規協賛団体を募ります。)

## 「私の津島高校 裏街道をゆく」

二〇一三年九月三日(火) 於 津島市文化会館

ダイジェスト版

母校の創立一〇周年記念事業にて、生徒の思考と作文能力の向上を願い、懸賞論文制度が誕生しました。寄せられた作品は期待に応える力作が多く、そこには、その生徒の家庭環境がにじみ出ていました。私は大人として、親として、背筋を正される思いになり、入賞作品を幅広い人たちに読んでいただき、より幸せな家庭づくりに役立てていただければ、と思いました。

## 稲葉さんの咲かせた花園を訪れよう

三稜会会長 横井 義一

審査委員長の稲葉真弓さんも、手ごたえを感じておられました。三年目の審査会するとき、稲葉さんの名前を冠した賞へ発展させたいと提案したところ、喜んでくださいました。そして、「私の津島高校 裏街道をゆく」と題して稲葉真弓（文学）賞創設記念講演をしてください、高校時代に文学に関心をもち、作家として大成していかれた人（軌跡）を熱く語られました。

稲葉文学は、多くの人たちを楽しませ、数々の賞に輝いています。この輝かしい功績を、末永く讃えていく場を作りたいとの願いが通じ、稲葉さんの遺品を三稜会に寄贈していただくことができました。稲葉さんが咲かせた美しい文学の花ひとつひとつを辿ることによって、皆様の人生をより豊かにする何かを感じ取っていただける場となることを願います。「稲葉真弓賞」と併せて、皆様とともに末永く見守ってまいりたいと思います。

### ◆文学賞の誕生の意義

文学の世界は曖昧模糊としていて、心の世界を描くので、人の心の中の魂に触れるようなジャンルであり、新たに津島高校で文学賞ができるのは本当にうれしいことである。私の人生は、津島高校を出発点として、文学というものと格闘するための人生であった。その格闘は、裏の暗い部分ばかりを歩いてきたものだが、その暗い部分が文学をやっていくのにとっても役に立った。

### ◆文学との出会い

私の文学との出会いは、この津島高校だった。津島高校では演劇部に属していた。演劇祭で、ある学校が、テネシー・ウィリアムズの『ガラスの動物園』という作品を取り上げていた。引きこもりの少女ローラと、ジミーというお兄ちゃんとお母さんの母子家庭。お母さんとの軋轢、ローラの悲しみを全部背負って、やがてお兄ちゃんの家を出る。何年後かの回想シーン、舞台に照明がパツと当たり、青年のひとり語りが始まる。「僕は月よりも遠い場所に来てしまった。月は遠いけれども、その月よりも遠い場所に僕は来て



しまった。」と。それは時間のことを言っているのだが、それと家族を捨てた悲しみというものが、月よりも遠い場所として彼の中に刻み込まれている。その「月よりも遠い場所」という一言が、私の心にグサツときた。私も「月よりも遠い場所」に行きましよう、とそのとき思った。それが有意義な文学であったのである。

もうひとつ津島高校での文学との出会いがある。それは現代国語の教科書に載っていた西脇順三郎さんの詩であった。たった三行の「天気」という詩である。「覆された寶石のような朝／何人（なんびと）か戸口にて誰かとささやく／それは神の生誕の日。」最初はこんな訳わかんない詩をなんで教科書に載せるの、って思ったけど、何か読んでいくと自分なりの解釈

もでき、解釈がいろいろできる不思議な詩を手放せなくなってしまう。西脇順三郎さんはモダニズムの詩人で、[ambivalent]という詩集が非常な評判を呼んだ。私もそのモダニズムの詩にとっても惹かれてしまった。名古屋の同人誌に出入りするようになった。それから私は詩を書くようになって、高校時代から詩に馴染んでいた。この新しい詩のスタイルが、後に私の小説の文体とか、小説の内容とかに非常に影響を与えてくれる。高校生のときに出会ったものは、後に何かの形で花開く、あるいは知らない間に蓄積されていく。私の大地の何層目かに津島高校があったのである。だから自分の文学のことを考えたときに、あそこで演劇部をやったよかったなとか、あの教科書に出会ったよかったなとか、あの「天気」という短い三行の詩に出会ったよかったな、ということ時々思う。

◆脈々と流れる私の中の津島高校  
私はあまりにも本を読みすぎて、学校の勉強が嫌いで嫌いでひどい成績だった。でも学校の勉強がだめでも、人生というのは大丈夫なんだ、と言いたい。橋本富慈という女性の英語の先生、いつもお着物で学校にいらした、とてもきりつとした素敵な先生が、私があまりにも成績が悪いので、声をかけてくださった。私は口から出任せに、「先生、ごめんなさい。私、神経衰弱です。」なんて言っていたが、後ろから支えてくださったささや

かな言葉に感謝している。成績が悪いまま卒業するという恥ずかしい裏の顔だが、今思えば、人生において出来の悪い時もあればいい時もある、という地に足がついてあまり動揺しなくて済むような意識は生まれた、とは思う。

私の旧姓は平野と言って、結婚して稲葉になった。相手は津島高校のひとつ上の演劇部の先輩だった。結婚して東京に出て、彼が会社員になって、大阪に転勤になって、いろいろ有為転変の中で距離が離れていって、結局別れてしまった。でも稲葉という名前だけは使っている。実はうちの母と父も津島高校で出会う、結婚している。津島高校は、父と母との時代から私の恋愛、結婚とずっと繋がってきた、まさに脈々としたルーツみたいところである。

#### ◆東京での下積み生活

##### ―貧乏が教えてくれたもの

上京後、書いては投稿するが必ずボツになってしまふ。しかし書くことが好きだったのでめげずに書き続けられた。するとひとつひとつかき、ふたつ新人賞にひっかかりというふうになった。書くことが自分にとってすごく大事なことになっていった。とにかく書くことに夢中になってしまっていた。夫とは別れることになり、一人暮らしが始まった。このときの一人暮らし、貧乏暮らしはとても素晴らしかった。風呂敷かぶって歩いていたの、私。模様さえ選べば、風呂敷もおしゃれなものになって、せつせとミシンで縫って、洋服として着ていた。

この頃食べていたものは、ひじき、コーヤードフ、わかめなど、水に戻すと大きく膨れるもの。ちよっとお金が

あるときは、チーズを買ってひじきをグラタン風に焼いたり、卵とじ風みたいにアレンジした。こうした洋服や食べ物、貧乏生活における体験、自分の工夫が、小説を書くのに生きたのである。作り方、発想さえ変えれば物事はこんなに豊かになる、こんなにおもしろいものになる。これを小説の中に工夫する、ということをお見せしたのである。『風と共に去りぬ』の中で、主人公が緑色のベルベットのカーテンをドレスに仕立てるシーンがあった。それがとても素敵で、私も真似してみようと思つて、古いカーテンを洗ってドレスにしてみた、みんなが珍しがって、逆にすごくおしゃれだと褒めてくれた。もう得意で得意で、私は生かされる、と思つた。

#### ◆転機―覆面作家から純文学への挑戦

貧乏生活を知った編集者から、アニメーションのノベライズ、小説化を勧められた。くる仕事は全部断らなかつた。するとそのノベライズが何万部と売れちゃつた。私はそのときペンネームを使って、覆面作家としてやっていた。貧乏生活から急にお金がどんどん入ってきてびっくりだった。引き受けていなくなつたら、私はどうなつたことか、と今は思う。一ヶ月に一冊書く。それが自信になり、純文学だつて絶対書ける、と思つた。パブルがはじけるとノベライズのお仕事は下火になつていって、幕引きになつた。そのときにはじめて私は、自分の書きたいものを渾身の力をかけて書こう、と思つた。

それが『エンドレス・ワルツ』というモデル小説だつた。麻薬におぼれて

いく若者のカップル、実在の作家鈴木いづみとサククス奏者阿部薫との恋愛小説である。暴力あり、薬物による幻覚あり、もうぐちゃぐちゃだけれども、彼らの青春は輝いていた。彼らの生は、そういうことでしか燃焼できなかった。負の世界、マイナスの世界でしか生きられない人がいる。彼らの中にある負が、彼らを生かしている。そのマイナスの輝き、負の輝きを、私は汲み上げたかった。私が生きられなかつた生を生きていく。そういう生は嫌だ、という切り捨て方もあるが、非常に不快な、とても褒められたような生き方ではないが、そこに阿部薫の、鈴木いづみの人生の物語、それぞれがあつて、摩擦をしながら、ひとつの青春物語を作っていく。そういう話を『エンドレス・ワルツ』で書いたら、たまたま割に大きな賞(女流文学賞)をいただいた、それから私は小説家として独り立ちをしていくことになった。

#### ◆負の世界こそ人間の世界

私は、鈴木いづみと阿部薫を知つていたわけではない。ある日、本屋さんへ行つたら、真つ黒な薄い本があつて、タイトルもなにも付いてない。生き生きした本がある中にお棺があるみたいに死の世界がポツと黒く、真つ黒くあつた。そこに阿部薫の人生が書かれていて、鈴木いづみとの関係も書かれていた。しかも私と同世代の人の話だつた。私はびっくり仰天をするとともに、嫉妬した。私も夫と別れたらいろいろあつたけど、それは自分にとって激しいものではなく、そうせざるを得ない自然の流れの中で生きてきたことである。しかし、この人たちは60年

代70年代のラジカルな東京の文化、いろんな過激なものがいっぱいあつた、それらを全部取り込んで東京という街で全身で生きていた。

その全身で生きるということが、当時の文化の負の部分を引き受けることだつた。それが私にとっては痛ましくも嫉妬に駆られ、その人たちの人生をなぞつてみたい、と思つて書いた。だから私の中には、鈴木いづみや阿部薫に通じる負の世界があつた。私は、負の世界こそが人間の世界ではないか、とどこかで思つているところがある。

だから今の私の中には、どこかゆがんで、しかし人を捉えて放さない、すごいねつていう人と出たい、と思つている。人間ってダサくて汚いもの、と私は思つている。そこにその人らしい輝きがある、その人しか出せない輝きがある、そういうものを拾っていきたい、出たい、すくい上げたい、一緒にいたい、という気持ちがすごく強い。だからたぶん小説家になつたんだろうと思う。小説家というのは、人間の弱い部分とか汚い部分とかうまくいかない部分とか、一生懸命そこを乗り越えていく、あるいはそれを引き受けていく、そういう人間を多く書く。

#### ◆文学から学んだこと

##### 文学にできること

文学から学んだことは、鈴木いづみのような負の世界があること。しかし負の世界の輝きがあるということ。それから弱い人たちと触れ合うこと。私も弱い。貧乏ばかりしてきたし、小説家として芽も出ない。叱られ、つかえされても、また頑張ろうと思ひ、ちよつとずつ乗り越える力を会得してい

た。食べるために、生きるために書いてきた。

もうひとつ、文学とは何か、言葉って何だろう、と考えさせてくれることが、つい最近あった。二年前の東北の津波、大地震である。あのとき私は東京の自宅で仕事をしていて、そうしたらとにかく揺れて揺れて、マンションの外に飛び出したら、マンションがグラグラ揺れていて、これはとんでもないことが起きた、と思った。揺れが収まった後に部屋に飛び込んでニュースを見た、あの津波がドーッと来るのが見えた。あの映像は今も脳裏に焼き付けられている。あの津波に二万人の人たちが命を失った。そのとき私はこの巨大な災害の中であって、何ができるのか、何も思い浮かばなかった。しばらくしてから、私にできること、それは小説を書くことしかできない、言葉しかない、と思った。ところがその言葉が出てこない。そこへ友達が電話をかけてきて、「私たちは言葉を駆使する仕事をしている。この言葉で何かやらない？」と言ってきた。詩人たちを集めて、この災害のことを書いた詩を、死者たちを弔う詩を作って、小さくてもいいから朗読会をやる、というのである。私はすごく共感を覚えて、朗読会で死者を弔う、亡くなった方に言葉を手向ける、あるいは亡くなった方が何を言いたかったか、その言葉をすくい上げることだ、と思い、詩



人たちに呼びかけた。20人くらい集まって、朗読会をやった。みんな言葉を失って、泣く人、うつむいてずっと涙を流している人、手を合わせて祈る人いっぱい来てくれた。私は鍋の詩を書いた。海を行く鍋、家の台所から海に流されていった鍋、いろんなものにおつかりながら、遠くへ遠くへ運ばれていく。その鍋の中にはお米があつて、日常があつて、そして家族があつて、昨日の二時何分までの時間がお鍋の中に詰まっている。そういう拙い詩しか書けなかったけれども、多くの人たちの共感を呼んだような気がする。

#### ◆言葉との出会い、発見を

言葉との出会いは、様々な出来事の中で、みなさんにこれからきつと生まれると思う。津島高校での生活を十分楽しんで、自分の力を信じて生きていっていただきたい。裏街道の話も少ししたかったけれど、貧乏生活とか、負の世界に出会ったこととか、私の裏街道のひとつだと思つて理解してほしい。

講演会の全文は三校会ホームページに載せてあります。是非ご覧ください。また、平成25年5月の懸賞論文審査委員会にて、その年の募集(第4回)から「稲葉真弓文学賞」とすることに決定し、9月3日に記念講演が行われました。平成26年度募集(第5回)より「稲葉真弓賞」と改称されました。

## 第5回 稲葉真弓賞 受賞作品

### ●最優秀賞●

#### 時間をもつ「力」

清林館高等学校

一年 松本 歩純

「三年も経った」のか、「三年しか経っていない」のか。二〇一一年三月十一日、私の小学校の卒業式が間近に迫っていたころ、東日本大震災が起きた。家に帰って、いつも見ている夕方のドラマを見ようとしてテレビをつけたら、地震の報道ばかりだった。黒い津波が防波堤を乗り越えて人を、街を、押し流していく様子が映し出されており、あまりの凄まじさに圧倒され、被害の大きさを実感できないまま、テレビを見ていたことを今でも覚えている。

その年の夏休みのこと、母親に「東北にボランティアに行こう」と言われた。がれきの片づけや、避難所での炊き出しなど、力になれそうなことはたくさんあった。しかし私は「行かない」と言った。「休み明けには定期試験があるから勉強に集中したい」と。それでも母は、何度も私を説得しようとした。「あなたはこれからの人生で何度か東北を訪れるかもしれないけれど、震災後の被災地は復興に向けてどんどん変わって行く。だから今行かないと、あ

なが見て、感じて、受け止めなければならぬ現実を知らないままになってしまふよ。」それでも私は東北には行かなかった。本当は、自分の中で試験のことは言い訳だということは分かっていた。しかし、その時の私には、被災地の姿を見て、被災された方の話を聞いて、現実を知るといふ覚悟が、怖くてできなかったのだ。

だが、そのあとすぐに後悔した。「どうしてあの時行かなかったのだろう。」そんな思いをもったまま中学校三年間を過ごした。そして昨年(二〇一四年)三月八日、私は初めて東北を訪れた。震災から三年が経っていた。その三年を長いと捉えるのか、短いと捉えるのか。「もう過去に起こった大きな災害」と捉えるのか、「まだ復興の真つ只中にある現実」と捉えるのか。私は東北に行つて三年という「時間」をいろいろな角度から見えてきた。

私が中学生になって卒業するまでの三年間で、被災地の様子は大きく変わった。私が訪れた石巻、南三陸、女川、気仙沼、大船渡、陸前高田などの津波被害が大きかった地域では、津波で流されてきた家や車や船のがれきは撤去されていた。見渡す限り、同じ日本とは思えないほど本当に何も無いのだ。のっぺらぼうの地が続く、その平らな土地に新しいかさ上げ道路や、住宅の建設などが少しずつ進んでいた。被災直後に比べれば、確実に復興に向けて東北は歩んでいる事が分かる。しかし、その一方で三年も経つたのに未だ仮設

住宅で暮らしている人が大勢いたり、原発事故の影響で遠くまで避難している人が大勢いたりする。私が石巻の仮設住宅にボランティアに行ったときに出会った、一人暮らしのおばあちゃん、津波で家族を失ったそうだ。三年経って、少しずつ笑顔で過ごせるようになったと言っていた。その一方で、まだ震災前のように元気がないとも言っていた。

被災した人たちにとってこの三年間は、被災地のがれきは撤去され、工事車両が行き来している。震災の爪痕がだんだんと目に見えなくなっている。昨日あったことのようにつらい体験を忘れられず、それを乗り越えようとしている人がいる。それでもまだ復興という言葉には程遠く、不自由を感じながら生活している人がいる。震災直後は毎日のように報道されていた被災地の様子も、最近は減っているように感じる。被災地から遠く離れた岐阜に住んでいるので、もう終わった他人事のように感じてしまう私がいるのも事実だ。三年前がとて昔に感じられる。だから私は十二月にもう一度東北に行った。三月からの九か月で変わったこともあれば、変わっていないこともあった。そこで改めて「時間」について考えてみた。

「時間」とは、私たちが前に進ませるプラスの力でもあれば、月日が経てば忘れてしまうというマイナスの力でもあると思う。震災からの三年間は、同じ三年でも人によっていろいろな感じ方がある。まだ三年か、と感じたり、

もう三年か、と感じたり。しかし、私が東北に行って感じた本場に大事なことは、これからの時間を、いかに私たちが被災した人たちとの間で「共有」していくかということである。被災した人たちにとって震災はまだ「現在」のことなのに、被災者ではない人たちにとってはもう「過去」の出来事である、というように時間の共有が出来なくなっている、きつと復興は進んでいかない。また、私たちが被災地の時間を共有することは、被災地の現在の様子を知らなければならないことだ。それを知ること、自分たちが、直接の被害を受けていなくとも、自分の家族や子供、孫に震災の姿を伝えられる。長い時間を経ても震災があったということの後世に伝え、教訓にできるということである。それこそが、中学一年の夏、母が私に言った「あなたはこれからの人生で何度か東北を訪れるかもしれないけれど、震災のあとの被災地は復興に向けてどんどん変わっていく。だから今行かないと、あなたが見て、感じて、受け止めなければならぬ現実を知らないままになってしまふよ。」という言葉の本質なのではないかと思う。

今年が震災から四年になる。少しづつ忘れ去られていく記憶もあるだろう。だからこそ、この先も私は忘れないために被災地の時間を共有していきたいと思うし、そのために何度も東北を訪れたいと思っている。そうすることで、すこしでも復興の力になればと思う。時間ももつ「前に進ませる力」を私は信じているし、大事にしていきたい。

## ●優秀賞●

### 「体感速度」

愛知県立津島東高等学校

二年 谷川原 孝明

だ・る・ま・さ・ん・が・ころんだ。幼稚園児の僕は、息をひそめて両手両足の指の先までに全神経を集中させる。まばたきすらせずに全ての動作が静止した状態で、かすかな体の揺れが鬼に見つかりはしないかと、どくんどくんと心臓の音だけが体中に響いている。この時、僕の動作は完全に静止しているはずなのに、僕の静止状態とは何の関係性もなく時は止まることなく流れている。そして、三十分くらい前。原稿用紙を見つめながら、何をどう書いたらいいのだろうと考えだした瞬間から、僕の思考回路は停止した。もちろん、鉛筆を握りしめる僕の手も、原稿用紙の上で止まっている。僕の体の動作も脳内の思考も完全に静止しているはずなのに、カチ、カチ、カチと目の前の時計の秒針だけは、一定のリズムを奏しながら規則正しく動いている。僕の動きのすべてが停止しても、僕の時は止まることなく流れているのだから、時とは、摩訶不思議なものである。時の不思議を考えると一番に思いつくのが、時の長さの体感速度だ。ここ数年、毎年年末になると僕の両親は、決まって同じ会話をする。「あーあ、今年も、速かったね。」「なんか、この年になると一年があっという間だよ。」

またひとつ年を取るね。」どちらからともなく始まる我が家特有の年末の風物詩である。年齢を重ねるほどに一年は短く感じる。これは、僕の両親に限ったことではない。空き地ではじめの一步に明け暮れた幼少の頃、校庭でドッジボールばかりをしていた小学生の頃、ハンドボールに夢中になった中学生の頃、そして今現在、僕自身の体感速度を考えてみても、幼いころよりはるかに今の方が時の流れを速く感じる。このように、年をとるにつれ時間が経つのが速いと感じる人は多い。そこで、なぜ大人になるにつれ時間は短くなるのか、一年の体感速度はなぜ年々速くなるのか、これについて少し調べてみた。「体感的な時間の長さは、年齢の逆数に比例する（年齢に反比例する）。フランスの哲学者、ポール・ジャネが発案し、甥の心理学者・ピエール・ジャネが著書において紹介したジャネの法則というものがあった。科学的な証明ではないが、時間の経過を心理学的に説明している法則だ。たとえば、五十歳にとつての一年は、人生の五分の一。かたや五歳にとつての一年は、人生の五分の一を占める。そう考えると五十歳代の十年は、五歳の一年に匹敵する。だから人生が長くなればなるほど、心理的に一年を速く感じるのだそう。このジャネの法則が全ての人に当てはまるとは断定できないが、一定の速度で流れる時の体感速度が個々によって違って感じられるのは心理的要因に起因するのは確かだろう。では、時の流れの体感速度を考えるとき、その差異が生じるのは年齢によ

るものだけののだろうか。いや違う。様々なシチュエーションによっても、その速さは変わってくる。例えば、月曜日。週の前半は金曜日までをとつてもなく長く感じる。しかし、水曜日から日曜日にかけては、同じ五日間にも関わらずとても短く感じる。その体感速度は、土曜、日曜日には更に加速がかかりあつたという間に月曜日が訪れる。こんな経験は、誰にでもあるのではないだろうか。僕の場合は、一時間五分の授業時間もそのひとつだ。退屈な授業時間は時計ばかりを眺めては、まだ五分しか過ぎていない、後三十分もあると、時間が過ぎないことが苦痛にすら感じられてくる。しかし、同じ五分分のはずなのにテストの最中の授業時間は異様に短い。特に、問題が解けずに焦っている時は、やはり更なる加速がかかってくる。そして、僕の体感速度に最も差異が生じるのは、部活動でのハンドボールの公式戦だ。僅差で勝っている時のラスト十分はとても長く感じられる。相手チームに得点を奪われぬように逃げ続けるラスト一分に至っては途方もなく長い。しかし、その逆で、逆転に挑み続けるラスト十分は瞬間に時が過ぎてゆく。きつくり十分あつたはずなのに時間が足りなくすら感じられる。そして、幸運にも逆転し試合終了のホイッスルが鳴り響いた瞬間には、止まるはずのない時が一瞬止まってしまったかのような錯覚すら覚えるから、やはり時とは摩訶不思議なものである。

一年は、三百六十五日と四年に一回のプラス一日。一日は、二十四時間。時間とは、本来規則正しく決して狂うことのない絶対的なものだ。しかし、その体感速度は、年齢やシチュエーションや個人個人の心理状態で、速くもなり遅くもなりうる。過去から現在、そして未来へと経過していく時の時間軸は、永遠に続く。しかし、一人一人の時の流れには必ず終わりが訪れる。僕たちに与えられた時間には限りがあり、その尺度を決めるのは自分自身の生きざまだ。たとえば、同じ五十年を生きた人がいたとする。ある人は、人生長かったと言い、ある人は、あつたという間の五十年だったと言う。生きた時間の絶対値は同じはずなのに、明らかに流れるスピードは違うのだ。僕が人生を終えるとき、長かったと思うのか短かったと思うのかわからない。ただ、今はっきりと言えることは、与えられた時間に限りがあるならば、一分一秒をも大切に毎日を充実して過ごしたいということだ。その結果、人生があつたという間に終わってしまったのも構わない。生きた時間の長さより、その時々をどう生きたのかの生きざまに、生きる価値があるのだから。

### ● 優秀賞 ● 「時間には厳格に —— 相対化の試み」

愛知県立津島東高等学校  
二年 濱島 朱里

私たちの住んでいる国、日本は時間に厳格であるといわれている。地域や個人によって時間に対する感覚は異なるが、他国と比べるとやはり日本は時間に厳格であるといえるだろう。一説には日本人の気質や国民性からだと書かれているが、はたしてこれは絶対的に良いことだと言えるだろうか。考察してみたい。

確かに、時間を守るということは日本人の一般的な常識である。時間にルーズな人は何事においてもルーズな人だと思われ、他人からの評価を落とすことにもつながる。しかし私は、時間に縛られ過ぎることも良くないと考える。なぜなら、何もかもが時間に縛られている現在の状態では、本来の目的を見失うおそれがあるからだ。

数年前にJR西日本で起きた福知山線脱線事故をご存知だろうか。この事故は、急カーブにおけるスピードの出しすぎが原因で起きたものであった。事故の要因とされるものは様々あつたが、そのうちのひとつに運転手がダイヤの遅れを取り戻すために焦っていたことがあげられる。なぜ運転手がそんなにも焦っていたのかというと、当時JR西日本では数分遅れただけでも日勤教育という名のパワーハラスメントやモラルハラスメントが行われていたからだ。この運転手は以前にもこの懲罰を受けており、もう二度と受けたくないという気持ちからさらに焦りを加速させた。確かに時間通りに、ダイヤ通りに運行されることは利用者にとって非常にありがたいことである。しかし、電車やバスなどの運転手は人の命を預かっているのだから乗客の安全を一番に考えるべきではないだろうか。福知山線脱線事故で、運転手は懲罰を免れ

るために、安全に運転することよりも時間通りに運転することを優先した。運転手の懲罰を受けたくないという気持ちも理解できる。遅れを出さないために教育をするのも、一概に悪いことだと言いきることはできない。この事故で誰が、何が悪かったかを特定することはできないが、もし日本が、日本人の考え方が、そこまで時間に縛られていなかっただらどうなっていただろうか。多少の遅れを許すことができる心のゆとりがあつたなら、運転手は日勤教育に怯えることもなかったであろうし、ダイヤの遅れに焦って規定の速度を無視することもなかっただろう。もしこうだったらというのを嘆いてもどうしようもないが、時間を守ろうとするのがゆえに安全に乗客を運ぶという本来の目的を見失っているのは本末転倒だ。このように、時間には厳格であるべきだという強迫観念の故に、本来の目的を見失ってしまうことは、私たちの周りでもたびたび起こりうる。わかりやすい例でいえば、提出期限の決められている書類などがあげられる。特に期限が迫っているものであったり、自分の手に負えないものであったりすればなおさらだ。もちろん期限内に内容のしつかりしたものを提出できるのが一番良いことであるが、時には理不尽な要求をされることもある。そんな時とりにあえず提出するというのに気を取られ、最も重視すべき内容が希薄になつてしまいがちだ。たとえ提出できたとしても全く身になっていなかったら、それこそかけた時間が無駄になつてしまいかねない。こういった経験をした

ことがある人は少なくないだろう。このように、私たちは普段から時間を気にしすぎるあまりに、本当に大切なことを見逃してしまうことも少なからずあるものと考える。

私が過剰な時間の厳格さを疑問視するのはもう一つ理由がある。それは、時間に縛られることで個人の事情が無視されることがあることだ。自分の願望があるならば、それに対して時間を投資することは当然必要になってくる。けれども多くの人が社会に流され、自分の望みに対して時間を使うことが後回しになりがちである。相手に物を頼まれたとき、断るに断れず自分のことよりもそちらを優先してしまったなどという経験はないだろうか。これが気の知れた者同士の間でなら、気安く断ることができるかもしれない。しかし仕事であつたらどうだろうか。日本では始業時間に厳しいが、終了時間には非常にルーズである。サービス残業があたり前のように思われていることもある。断れない雰囲気もあるのは確かだが、自分が何よりも優先すべきことが世間では重要視されないという矛盾が生じ、そこに自己犠牲が生まれることもしばしばである。これは育児などにもいえることだ。母親が自分を犠牲にしても家族に尽くし、子どものことを中心に考えてばかりでは自分の幸福感を満たすことはできなくなる。確かに自分ではない他者のために時間を使うことは悪いことではない。むしろ美德といえるだろう。だが、それがス

トレスになってしまふのではやはり意味がない。自分の時間をつくるためにいい意味でもう少しわがままになつてもよいのではないだろうか。

このように、私たちは時間に対して過剰なまでに厳格であるがゆえに本当に大切なことを見失ってしまうことがある。それは大切な人の命であつたり、自分の中に培われる貴重な経験であつたり。失つてから気づいたのではもう遅いこともあるのだ。だからこそこれから物事の本質を見失わないために厳格な時間感覚を持ちながらも、もう少し時間についておらかな考え方を持つべきだと私は考える。

### ●優秀賞●

#### 「時間について」

愛知県立津島高等学校  
一年 岡田 詩絵

時間、それは変化を与えてくれるものだ。もちろん、時間の流れを目で見ることはできない。断片的には一瞬である。しかし、とどまることなく流れるこの時間によって私たちは多くのことを積み重ねてきた。過去、現在、未来と切れ目なくつながるその時間に、思い出を刻むと同時に私たちには成長という変化が訪れる。変化はなにも成長のみとは限らない。何気なく過ごす日常の中にも、誰も気が付かないような細部あるいは、あまりにも身近で気

が付かないようなところでも、変化は起きているかもしれない。

時間が私たちに与えるものの例として、成長の過程で養われる知力や体力、気力などの自分自身の力があげられる。私たちは充実した時間を過ごすため、そして自身の力を高め達成感を味わうために、目標を定める。それに向かつて努力することで、自分の可能性を感じ、またそこから努力することへのやる気が生まれる。初めはうまくいかず、壁に突き当たることもあるだろう。しかし、諦めず繰り返すことに意味があるのでないだろうか。

失敗することも一つの経験だ。失敗は成功のもと、という言葉にもあるようになぜ失敗してしまったのか、原因を追求し欠点を補つて改善することによって見えてくる道があるはずだ。

時間をただ浪費するのではなく、短時間であっても集中できる時間を作ることで、互いに良い刺激を与えられる友人と過ごすこと、そして何よりも恐れることなく果敢に挑戦することが質の高い時間へと繋がり、それを求めて励むことが大切だと考える。困難に見舞われることもあるが人生は山あり谷ありだ。「今」という時間と共に前を向いて進んでいくことが新たな道を切り開くかぎとなり、その道を踏みしめ進んだ先には目標達成というゴールが待っているはずだ。今こうして私が高校へ通い学ぶことも、友達と共に笑いあっていたらられるのも、中学生の頃に持っていた志望校合格という目標を達成し一

つの結果を得たうえで、次の夢を実現させるための道を歩んでいく過程にあるのだ。自分の意志を持って進んで行く道には終わりなどない。どんな局地に立たされたとしても、自分の命がある限りは一つの道が続いていると思うからだ。

成功という生きる価値を見出すことに没頭するばかりではなく、時には本来の道を見つめ直し自分にとっての本当の価値を考えることが、自分自身を磨き、自分自身の力を高めることに繋がるのではないだろうか。

時間は、私たちに良い変化を与えてくれるがそればかりではない。時間が起こす変化によっては、私たちが失うものもある。時間とは、無限かつ雄大なものでありながら、私たちにとっては限られた中の希少な財産にすぎない。人間には寿命があり、定められた運命と共に死と隣り合わせで生きている。今、世界中の人がこの同じ時間を過ごすなかで、この瞬間に生命が尽き人生の最期を迎えた人もいることだろう。身近な人のみに限らずとも、時間は大切な存在との別れを与え、時には生命をも奪い私たちに悲しみを与えるものの一つなのだ。

しかし、辛く苦しいその別れという現実には私たちは目を逸らしてはならない。前へとしか進んで行かない時間の流れに逆らつて、過去を惜しむばかりでは何も得るものはないからだ。現実を受け入れることは容易ではないが、それについて理解しきちんと向き合う

ことで、私たちは成長することができ  
るのでないだろうか。

時間によって失われるものは計り知  
れない。しかし、私たちが生きてい  
るということは、失ったものを新しく取  
り戻す時間があるということでもある  
た。え、失ったものが大きくて心に穴  
があいたとしても、小さな幸せを積み  
重ねることによってその穴を埋めるこ  
ともできると思う。私たちは出会いと  
同時に別れを経験するが、人との関わ  
りを通して多くのものを得ることで、  
さらに大きな存在へと成長していくの  
である。

また時間について、私は自然と問題  
を解決してくれるものとも思うが、  
そうではないと思う人もいるかもしれ  
ない。しかし、実際に起きた阪神淡路  
大震災が兵庫や大阪に及ぼした甚大な  
影響は、二十年という歳月を経て跡か  
たもなく消えたように思える。こうし  
て、現在の姿を取り戻すことができた  
のは、長い間復興に協力し続けた人々  
のおかげである。このように考えると、  
震災が起こした問題は人の手で自ら解  
決したと言っても過言ではないだろう。  
それ故、時間によって問題が解決され  
ると言い難い面もあるが、私は長い年  
月を経たからこそその結果だと考える。  
被災者は明日という日を信じることで  
復興することへの兆しを感じ、支援者  
も時間と共に前を向くことでその願  
いに応えることができたのではないだ  
ろうか。時間という一様の流れが私  
たちを一つに繋ぎ、心の支えとなつて希望  
を与えてくれたのだと思う。

胸を痛めるような辛い体験は、私

ちに時間の流れを繊細に感じさせ、改  
めて時間が意味のあるものだ教えて  
くれる。そして、時間が流れるとい  
ふあたりまえのことが、私たちを落ち着  
かせ、心の安定をもたらすのだ。この  
ように、時間は私たちに間接的に作用  
し光のごとく進むべき道を導くこと  
によって、自然と問題が解決するのだと  
考える。

これらのことは、時間という一つの  
くりの中で共に過ごす私たちの成長  
を切実に物語っているように感じられ  
る。どのような変化も時間が与えたと  
同時に、自分自身の意志が選択し与え  
たもので、人生という道に影響を及ぼ  
す。したがって、人それぞれの道があ  
るといふことは誰もが平等に与えられ  
ている時間にも、私たち自身の使い方  
があるのだということである。皆平等  
に与えられている時間ではあるが、私  
たちがこの日々を平和に、そして切磋  
琢磨して過ごせることは幸せなこと  
なのだ。この恵まれた世の中の下、人生  
を歩むことができること、自分の望ん  
だ夢をかなえるチャンスがあることに  
感謝したい。そうすることで、より良  
い未来へと続く道が切り開けるので  
ないだろうか。

しかし、美德を貫き完璧を求めるこ  
とばかりがすばらしい人生に繋がる  
とは限らない。時には、余裕を持つこ  
とで自分に訪れる変化と触れ合い、時  
間の流れを肌で感じる  
ことで人生の価値を  
推しはかることも大  
切だと思う。



## 審査委員会

### 総評及び選評

今回は、八校から六一四名の応募を得、  
一次審査、二次審査を開催して選考し  
た。テーマを捉えた内容になってい  
るか、主観的な表現に偏ることなく、分  
析力、客観性に富んでいるか、普遍性  
があつて読み手を感動させるか、さら  
に具体例は生徒にとって身近な、読み  
やすいものになっているか等の観点か  
ら、作品を絞り込んでいった。多くの  
作品が時間を有限のものとし、今を大  
切に生きていこうという内容のもので  
あつた。時計をみるとき、過ぎ去つた  
時間の確認というよりは、これから先  
の時間を知るといふ行為に他ならない。  
そのように「時間」に対して前向き、  
意欲的な作品群に触れることができて、  
委員全員が高校生の「生きる」姿勢に  
感動し賛同した会であつた。

### ◎最優秀賞・松本歩純

#### 『時間をもつ「力」』

人間を前進させる時間と、人間を忘  
却に誘（いざな）う時間というように、  
松本さんは時間を両義性をもつものと  
分析している。東日本大震災を題材に  
取っているが、震災発生当時の自己と  
現在の自己とを対比させつつ、現実を  
受け止める覚悟を固めきれなかった彼  
女が、被災地の人々とこれからの時間  
を共有していこうと決意に至る、成長  
の軌跡を見事にまとめあげている。

### ◎優秀賞・谷川原孝明

#### 『体感速度』

絶対的な時間と、人間が実際に体感  
する時間とを、谷川原さんは対比させ  
ている。個人に与えられた限りある時  
間を充実したものにするのは、自分自  
身の生きざまであるとし、前向きに時  
間と対峙する姿勢に好感が持てる。「だ  
・ま・さ・ん・が・こ・ろ・ん・だ」から  
始まる表現力は出色である。

### ◎優秀賞・濱島朱里

#### 『時間には厳格に——相対化の試み』

濱島さんの文章は、問題提起から結  
論に至るまで、典型的な小論文の構成  
を取っている。「時間には厳格であるべ  
きだ」という一般論に別角度から切り  
込んでいる点には、独創性を感じる。  
福知山線脱線事故が題材をとつたこと  
により、高校生としての日常のレベル  
にとどまらない社会性・普遍性を確保  
している。

### ◎優秀賞・岡田蒔絵

#### 『時間について』

プラスの側面とマイナスの側面とい  
う両義的な性格を時間をもってしていると  
岡田さんは分析する。同じく平等に与  
えられている時間の中で、現実から目  
をそらすことなくきちんと向き合うこ  
とで、また、有限の時間の中で他者と  
の関わりを大切にすることで、プラス  
の時間が生まれるのだという思考に、  
積極性を認めることができる。